

石田浩理事長追悼

本会理事長の 石田浩先生は、2006年1月8日午後7時45分（現地時間）、肝不全のため台湾大学医学部の病院でお亡くなりになりました。享年59歳でした。本会は先生の急逝を悲しみ、若林 前理事長・下村 副理事長の追悼文を掲載いたします。

石田浩先生を偲ぶ

若林 正文

私が初めて石田先生にお会いしたのは、大学院生の頃、確か博士課程に進学して間もない頃のことではなかったかと思う。出席していたゼミの教授に勧められアジア政経学会に入会した。その年は一橋大学で学術大会があり、そのプログラムに石田先生の名前があった。学会というものに属して初めての機会だったので、私は勇んで出かけた。

石田先生はおそらく博士課程を修了されていたかもうすぐ修了という頃であったと思う。友人と行っていた台湾漢族農村調査に関する報告をされたと記憶する。なぜそうしたのか思い出せないのだが、その時私はわざわざテープレコーダー買って下げていき、報告開始前に石田さんに録音許可を求めたのが、言葉を交わした最初であったと思う。終了後に自己紹介し何か少しは話をしたのだが、これも内容は思い出せない。その頃、先生も私も髭は生やしていなかった。その後であったか、その場であったか、台湾調査に基づく論文の抜き刷りをいただいて拝読した記憶がある。先生は、その後も同じ系列のテーマの論文をいくつか発表された。それらをまとめたのが、最初の著書『台湾漢人村落の社会経済構造』（関西大学出版部 1985年）であったと思う。

その後しばらくはお会いすることもなかった。それぞれ、自分のことで精一杯だったということだろう。少なくとも私はそうだった。風の便りに先生が関西大学に職を得られたと聞いた。そうこうするうちに、私の方もようやく80年代後半になって東大教養学部で職を得た。この頃から、あちこちで相互に連携もなく、台湾研究に関心を持つ人の集まりができるようになっていた。石田先生は関西で「台湾史研究会」を中心になって運営され、私も東京で「現代台湾研究会」という勉強会を始めた。

その後、私が台湾で在外研究の機会を得たため、「現代台湾研究会」は会場が安定して確保できないために開店休業になっていたが、私が帰国後復活しようという話もちあがった際に、別途台湾文学の研究会をもっていた藤井省三氏がいつそのこと学会を作ったらどうかと提案してきた。これが日本台湾学会創設のそもそもの発端である。「現代台湾研究会」メンバーでこれに取り組もうと決めてから、東京以外でまずもって声をかけさせていただいたのが石田先生であった。

私と石田先生は、この間、アジア政経学会や現代中国学会の大会で、交流協会関係の会合や台湾の選挙の際にたびたび顔を合わせ、言葉を交わす機会があったのである。先生が一言のもとに賛同して下さったのは、東京のメンバーにとっても心強かった。

もちろん、創設の際の理事会にも石田先生の名があった。私は、よく言えば慎重、率直に言えば臆病なところのある人間であるが、石田先生は、積極的で楽観的である。最初の理事会会議の際、私は学会の実力から見て、学術大会を毎年やるのは無理で二年に一度、と提案したのだが、先生が「せっかく学会を作ったのだから、毎年やりましょうよ」と提案して、他の理事も同じ考えだったのかその通りに決した。先生が笑顔とともにこの提案をされた明るい声が今も耳の底に残っている。もちろん、その後の推移は石田先生の積極的見通しのほうが正しかったことを示している。

私は臨時理事会の一年も入れて日本台湾学会理事長を五年務めて、その後石田先生にバトンタッチした。私も先生を強く推薦したが、理事会でも、おそらく学会員全体でも衆望の帰する所であった。先生の舵取りのもとで、ずっと東京ばかりで開催していた学術大会も、東京以外での開催に次々に成功し、そのためもあって会員数も増え、一時心配された財政問題もだいぶ緩和した。私は大学での大の苦手の行政職と重なっていたためもあってだいぶ疲れていたのが石田先生にバトンタッチできてホッとしたし、学会のためにもよかった。そのような先生に学会が期待するところは依然大きかったのだが、理事長在任中に急逝されるとは思いもよらぬことであった。

先生の報告を録音したあのテープはどこへ行ってしまったのか。初めて先生に一橋大学で会ってからもう三十数年がたつ。その間わたしは引越しを重ねた。テープが残っていれば、先生の三十数年前の若々しい声が聞けたはずであると思うと残念でたまらない。

(2006年3月20日、相模原にて)



石田浩先生のお心を想い、悲しみは消えない

下村 作次郎

石田浩先生を追悼する文を書くのは気が進まず、きょうまで、ひきのばしてきた。これまで経験した恩師や親しい研究者との別れとは異なるものがある。

石田先生はなぜ逝ってしまわれたのか。石田先生が昨年 10 月に政治大学台湾史研究所に招かれて、客員教授として赴任されて以来、私は先生が帰国されるまでと思って、日本台湾学会の留守を預かっていた。といっても、必要なことはメールで相談し、指示を仰いでいたわけだから、実際は、留守番もなにもないのだが、それでも留守中に常任理事会を滞りなく開催しなければいけないとの緊張した気持ちはあった。先生の訪台中は、できるだけ要らぬ相談はもちかけまいと思い、メールもしないように心がけていた。私としては、先生はこの半年の在外研究を、人の 3 倍も仕事をするのでやっと勝ち取られたのだから、思う存分有効に過ごしていただきたいと願っていたからであった。が、いまにして思えば、もっと連絡を取ればよかつたとも思う。9 月末に先生から受け取った挨拶状には、台湾での研究生活をどんなに楽しみにしているかが、はがきいっぱい書かれていた。

私は、このように日本で先生の留守を預かっていたのだが、思いがけず、入院先の病院で、先生と最後に言葉を交わした日本人の一人になってしまった。というのは、12 月に訪台したちょうどその頃、先生が入院されたからである。先生の入院は、12 月 26 日だったようで、翌 27 日に政治大学に留学している森田健嗣君から電話でそのことを知らされた。私はその時、台中の静宜大学で孫大川先生と対談したあと、陳明柔先生の招宴で会食をしていた。その場には、関西大学関係者の曾煥棋さんや王恵珍さんもいたので、石田先生入院のニュースを伝えた。

その夜は、孫先生と一緒に台北に戻り、YMCA に泊まった。翌日、私は広島大学の前田直樹さんに会い、先生の病状を訊いた。前田さんが見舞われたときは、少し回復の兆しがみられたらしく、前田さんはその様子を私に話して、花蓮にある東華大学に講演に出かけられた。私は前田さんの話を聞いて少し安心し、午前中は山海文化雑誌社を訪ね、午後 3 時過ぎに入院先の萬芳病院に先生を見舞った。正直なところ、その時は軽い気持ちだった。

病室に行くと、先生はちょうど点滴台を押しながら病室を出て、談話室へ歩いておられた。私は先生に挨拶をして、いかがですかと話しかけた。談話室のソファーに座った先生は、「下村さん、この病気、こんなにしんどいとは知らなんだ、ほんまにしんどいわ」と、目をうつろに開けて、しんどさに耐えるように話された。そして、「この人たちがよくしてくれて、ほんとに助かってる」とも言われ、親身に先生を看病する若い人たちを気遣っておられた。私は先生に、「先生、こちらに来られてからも、お忙しくされていたと聞きますが、だいぶ無理をされていたのではないですか」と聞くと、「うん、こっちに来て、頼まれたことは全部こなし」と、俯いた姿勢で言われた。その言葉には、全力で台湾の人々の好意に応え、やるべき講義をし、頼まれた講演をみな引き受け、自分のやりたいこと、台湾研究のためにやらなければならないこともやってきた、という思いがこめられているようだった。私は、このときの先生の言葉を何度も思い出

す。実に先生らしい言葉だったが、私には、先生、どうしてそこまでやったんですか、という思いがつのる。

先生は、そのあと2時間くらいしてから、台湾大学医学部病院にベッドの空きが出たので、転院されることになった。これは、受け入れ先の、政治大学台湾史研究所主任教授の薛化元先生をはじめとする方々が、最善を尽くそうと努力してくださった結果だった。このときは、徹夜で看病していた龔玉齡さんや、政治大学の院生が付き添っていた。

先生が台湾大学医学部病院に移られてからは、最先端医療に期待をかけ、薛先生をはじめ政治大学の先生方、張勝彦先生をはじめ多数の友人が、祈るようにして先生のご回復を待った。この間、台湾政府関係者や交流協会、さらに台湾協会の関係者が、全面的にサポートに当たってくださった。日本台湾学会としては、松金公正さんに電話でいろいろなことを相談し、尽力いただいたことも忘れられない。

私は、30日に、急遽訪台された奥様と交代するようにして帰国した。先生は、発病後、約2週間、闘病された。この間、奥様を中心に、日本から駆けつけた圖左篤樹さん、松田吉郎先生、滝田豪さん、前田さんたちの献身的な看病が続けられた。さらに治療が長期化した場合を想定したサポート体制作りなどが、圖左さんたちと台北研究会の富田哲さんの間で相談されていた。しかし、1月8日午後7時45分（現地時間）、石田浩先生はついに帰らぬ人となられた。この間、先生の台湾の友人たちも多くお見舞いに来られたと聞く。

石田浩先生、いまも、なにかへの悔しさと悲しみが胸を突き、涙がとまりません。否、先生ご自身がこの現実を受け入れられないでいらっしやるだろう、そう思うと、この文を締めくくる言葉が見つかりません。

石田浩先生、どうか日本台湾学会の今後を見守ってください。

お別れに際し、生前のご厚誼に深く感謝し、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2006年4月9日)

